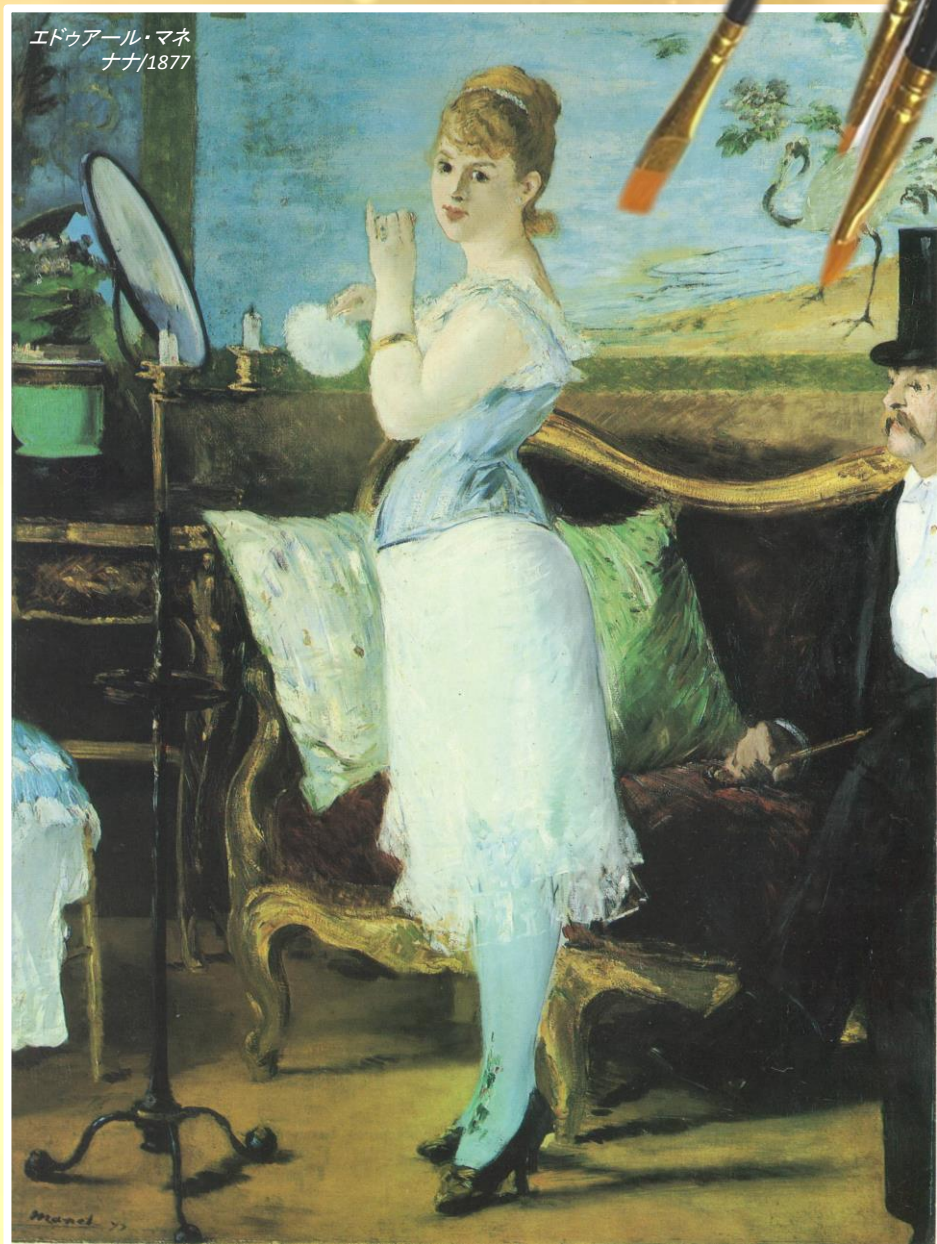


絵画を通して読み解く

# フランス文学

講師 村田 京子 大阪府立大学 名誉教授



フランス文学と造形芸術の関わりは深く、画家、彫刻家を主人公とする芸術家小説が数多く見出せます。しかし、小説の人物描写において絵画の比喩が使われるようになったのは、「芸術の大衆化」が実現された19世紀以降です。本講座では、19世紀の作家と芸術家の親密な関係を考慮に入れながら、小説の中で言及される絵画や彫像を手がかりに、19世紀フランス文学を読み解いていきます。

2024  
5/15 WED - 7/17 WED

14:30-16:00 毎週水曜日  
全10回

詳細は裏面をご覧ください▶

申込フォーム



- 会場 : 大阪公立大学I-siteなんば2階 (大阪市浪速区敷津東2-1-41 南海なんば第1ビル)
- 定員 : 60名 (申込者多数の場合は抽選) ■ 対象者 : どなたでも ■ 受講料 : 7,000円 (全10回分)
- 申込方法 : 大学Webサイト「申込フォーム」から申し込みいただくか、「往復はがき」で  
(1)氏名(フリガナ)、(2)年齢、(3)郵便番号・住所、(4)電話番号、(5)このチラシの入手先 をご記入の上、  
下記宛先へお申し込みください。 ※受講の可否は5/2(木)までに通知します。届かない場合は必ずお問い合わせください。
- 申込フォーム: 右記二次元コードまたは大学Webサイトからお申し込みください。
- 往復はがき宛先 ※返信用はがきは両面とも白紙でお送りください。  
〒556-0012 大阪市浪速区敷津東2-1-41 南海なんば第1ビル  
大阪公立大学 社会連携課「フランス文学」係

締切日  
4月21日(日)  
必着



■ 問合せ先 : 大阪公立大学 社会連携課 Tel 06-7656-5112 Fax 06-7656-5203

大阪公立大学  
生涯学習・公開講座  
WEBサイト ▶

大阪公立大学公開講座

検索



アドリエヌ・グランピエール=ドゥヴェルジ  
アベル・ド・ピュジョルのアトリエ/1822

講師：村田 京子  
大阪府立大学 名誉教授



## 講義スケジュール

第1回 5月15日(水) 第2回 5月22日(水)	<b>バルザックとドラクロワ—『金色の眼の娘』『ラ・ラブイユーズ』</b> バルザックは同時代の画家ドラクロワを高く評価し、小説の中で彼の名前や絵画に言及し、彼をモデルとする画家を登場させています。まず、実生活におけるドラクロワとバルザックの関係を見た後、ドラクロワがバルザックの作品に与えた影響を探ります。
第3回 5月29日(水)	<b>ジョルジュ・サンドとドラクロワ—『ピクトルデュの城』</b> サンドはドラクロワと親しく交流したばかりか、女性画家を主人公とする彼女の作品には、ドラクロワの影響が見出せます。それがどのようなものなのか、考察します。
第4回 6月5日(水)	<b>バルザックとジロデ（1）—『毬打つ猫の店』</b> 新古典主義の画家ジロデの聖母に喩えられる女性が主人公の作品を取り上げます。ラファエロやヘリット・ダウなど様々な絵画も参照しながら、その女性像を探ります。
第5回 6月12日(水)	<b>バルザックとジロデ（2）—『知られざる傑作』</b> 天才的な画家を主人公とする作品を取り上げ、物語の中で展開される絵画論をジロデの絵画論と比較します。アングルやティツィアーノのヴィーナス像との関連も探ります。
第6回 6月19日(水)	<b>画家のアトリエ—バルザック『ラ・ヴェンデッタ』、 デボルド=ヴァルモール『画家のアトリエ』</b> 画家のアトリエが小説の舞台となる二つの作品を比較し、男性作家と女性作家の視点の違いを、絵画を通して明らかにします。
第7回 6月26日(水)	<b>ピグマリオン神話—テオフィル・ゴーチエ『金羊毛』</b> ルーベンスの絵画を軸に展開するゴーチエの小説を取り上げ、バルザックの『知られざる傑作』と比較しながら、ピグマリオン神話と関連づけて検証します。
第8回 7月3日(水)	<b>ゴーチエの「石の夢」—『カンダウレス王』</b> ゴーチエの作品世界で完璧な美しさを持つ女性はすべて、大理石の彫像に喩えられています。彼の「石の夢」を実現した小説を取り上げ、それがどのようなものなのか、小説と密接に関わりのある絵画・彫像を参照しながら考察します。
第9回 7月10日(水)	<b>バルザックにおける「宿命の女」像—『砂漠の情熱』『従妹ベット』</b> 妖艶な肉体で男を誘惑し、破滅に追いやる女は「宿命の女」と呼ばれています。バルザックの作品において「宿命の女」がどのように描かれているのか、絵画と関連づけながら探ります。
第10回 7月17日(水)	<b>ゾラにおける「宿命の女」像—『ナナ』</b> 19世紀後半の自然主義作家、ゾラの小説における「宿命の女」像を、印象派の画家マネなど同時代の画家の絵画と関連させながら考察します。

※感染症の流行や自然災害等の影響により、日程・開催方法・講座内容が変更となる場合があります。